

カズイヌチカ

森鷗外

青空文庫

父が開業をしていたので、花房はなぶさ医学士は卒業する少し前から、休課に父の許もとへ来ている間は、代診の真似事まねごとをしていた。

花房の父の診療所は、大千住おおせんじゆにあつたが、小金井きみ子という女が「千住の家」というものを書いて、委くわしくこの家の事を叙述しているから、Loco《ロコ》Citato《チタト》として、()には贅ぜいせない。Monet《モネエ》なんぞは同じ池に同じ水草の生はえていゝる処を何遍も書いていて、時候が違い、天氣が違い、一日のうちでも朝夕の日当りの違ちがうのを、人に味あじわわせるから、一枚見るよりは較べて見る方が面白い。それは巧妙な芸術家の事である。同じモデルの写生を下へ手に繰たり返されては、たまつたものではない。

ここらで省筆せいひつをするのは、読者に感謝して貰もらつても好いい。

もつと

尤もきみ子はあの家の歴史を書いていなかった。あれを建てた

おがたぼう

緒方某は千住の旧家で、徳川将軍が鷹狩たかがりの時、千住で小休み

たびごと

をする度毎に、緒方の家が御用を承うわることに極きまっていた。

花房の父があの家をがらくたと一しよに買い取とった時、天井裏か

ら長さ三尺ばかりの細長い箱が出た。蓋ふたに御鋪物おんしきものと書いてある。

御鋪物とは将軍の鋪物である。今は花房の家で、その箱に掛物が
入いれてある。

火事にも逢あわずに、だいぶ久しく立たっている家と見えて、頗すこぶ

る古ふるびが附ついていた。柱はしらなんぞは黒檀こくたんのように光あっていた。硝が

ラス

子の器うつわを載のせた春慶塗しゅんけいぬりの卓こや、白しろいシイツおほを掩おほうた診察用の

寝台が、この柱と異様なコントラストをなしていた。

この卓や寝台の置いてある診察室は、南向きの、一番広い間で、花房の父が大きい雛棚のような台を据えて、盆栽を並べて置くのは、この室の前の庭であつた。病人を見て疲れると、この髯の長い翁は、目を棚の上の盆栽に移して、私かに自ら娛むのであつた。

待合にしてある次の間には幾ら病人が溜まつていても、翁は小さい煙管で雲井を吹かしながら、ゆっくり盆栽を眺めていた。

午前に一度、午後に一度は、極まつて三十分ばかり休む。その時は待合の病人の中を通り抜けて、北向きの小部屋に這入つて、煎茶を飲む。中年の頃、石州流の茶をしていたのが、晩年に国

を去つて東京に出た頃から碾ひきちや茶を止め、煎茶を飲むことにした。盆栽と煎茶とが翁の道楽であった。

この北向きの室は、家じゆうで一番狭い間で、三畳敷である。何の手入もしないに、年々宿根しゆくこんが残つていて、秋海棠しゆくかいどうが敷居と平らに育つた。その直ぐ向うは木槿もくげの生垣いけがきで、垣の内側には疎まばらに高い棕櫚しゆろが立っていた。

花房が大学にいる頃も、官立病院に勤めるようになってからも、休日に帰つて来ると、先まずこの三畳で煎茶を飲ませられる。当時八犬伝に読み耽ふけっていた花房は、これをお父うさんの「三茶の礼」と名づけていた。

翁が特に愛していた、蝦蟇がまで出という朱泥しゆでいの急須きゆうすがある。徑わたり

二寸もあろうかと思われる、小さい急須の代赭色の膚たいしゃいろはだえに Pemp higus 《ペンフィグス》という水泡すいほうのような、大小種々の疣いぼが出来ている。多分焼く時に出来損ねたのであろう。この蝦蟇出の急須に絹糸の切屑きりくずのように細かくよじれた、暗緑色の宇治茶を入れて、それに冷ました湯を注いで、暫く待っていて、茶碗ちやわんに滴たらす。茶碗の底には五立方サンチメエトル位の濃い帯緑黄色の汁が落ちてゐる。花房はそれを舐めさせられるのである。

甘みは微かすかで、苦みの勝つたこの茶をも、花房は翁の微笑と共に味わつて、それを埋合せにしていた。

或日こう云う対坐の時、花房が云つた。

「お父うさん。わたくしも大分理窟だけは覚えました。少しお手

伝をしましうか」

「そうじやろう。理窟はわしよりはえらいに違いない。むずかしい病人があつたら、見て貰おう」

この話をしてから、花房は病人をちよいちよい見るようになったのであつた。そして翁の満足を贏ち得ることも折々あつた。

翁の医学は Hufeland 《フウフェランド》の内科を主としたも

ので、その頃もう古くなつて用立たないことが多かつた。そこで翁は新しい翻訳書を幾らか見るようにしていた。素とフウフェランドは蘭らんやく訳の書を先輩の日本訳の書に引き較べて見たのであるが、新しい蘭書を得ることが容易たやすくなかつたのと、多くの障しょうが碍いを凌しのいで横文おうぶんの書を読もうとする程の氣力がなかつたのと

の^たために、昔読み馴れた書でない洋書を読むことを、翁は面倒が
つて、とうとう翻訳書ばかり見るようになったのである。ところが、
その翻訳書の数が^{かす}多くないのに、善い訳は少ないので、翁の
新しい医学の上の智識には^{すこぶ}頗る不十分な処がある。

防腐外科なんぞは、翁は分っている積りでも、実際本当には分
からなかつた。丁寧に消毒した手を^{ありあわせ}有合の手^{てぬぐい}拭^ふで拭くよう
な事が、いつまでも止まなかつた。

これに反して、若い花房がどうしても企て及ばないと思つたの
は、一種の Coup 《クウ》 [d'oe&il] 《ドエイユ》であつた。

「この病人はもう一日は持たん」と翁が云うと、その病人はきつ
と二十四時間以内に死ぬる。それが花房にはどう見ても分からな

かつた。

只これだけなら、少花房が経験の上で老花房に及ばないと云うに過ぎないが、実はそうでは無い。翁の及ぶべからざる処が別に有つたのである。

翁は病人を見ている間は、全幅の精神を以て病人を見ている。そしてその病人が軽かろうが重かろうが、鼻風だろうが必死の病だろうが、同じ態度でこれに対している。盆栽を翫もてあそんでいる時もその通りである。茶を啜すすっている時もその通りである。

花房学士は何かしたい事もし若くはする筈はずの事があつて、それをせしばらばらずに姑く病人を見ているという心持である。それだから、同じ病人を見ても、平凡な病だと思つたらなく思う。 [Int'essant] 《H

ントレツサン》の病症でなくては厭あき足らなく思う。又たまたま偶々
いわゆる所謂興味ある病症を見ても、それを研究して書いて置いて、業
 績として公にしようとも思わなかつた。勿もちろん論発見も発明も出来
 るならしようとは思うが、それを生活の目的だとは思わない。始
 終何か更にしたい事、する筈の事があるように思っている。しか
 しそのしたい事、する筈の事はなんだか分からない。或時は何物
 かが幻影の如くに浮んでも、捕捉することの出来ないうちに消え
 てしまう。女の形をしている時もある。種々の栄華の夢になつて
 いる時もある。それかと思うと、その頃碧へきがん巖を見たり無門むもんかん関
 を見たりしていたので、禪ぜんじょう定じょうめいた contemplatif 《コンタン
 プラチーフ》な觀念になつてゐる時もある。とにかく取留めの

ないものであった。それが病人を見る時ばかりではない。何をしても同じ事で、これをしてしまつて、片付けて置いて、それからというような考をしている。それからどうするのだから分からない。

そして花房はその分からない或物が何物だということを、強いて分からせようとしなかつた。唯ただ或時はその或物を幸福というものだと考えて見たり、或時はそれを希望ということに結び付けて見たりする。その癖又それを得れば成功で、失えば失敗だというような処までは追求しなかつたのである。

しかしこの或物が父に無いということだけは、花房も疾とつくに気が付いて、初めは父がつまらない、内容の無い生活をしているよ

うに思つて、それは老人だからだ、老人のつまらないのは当然だと思つた。そのうち、熊沢くまざわ蕃山ばんざんの書いたものを読んで、志を得て天下国家を事とするのも道を行うのであるが、平生顔を洗つたり髪を梳くしけずつたりするのも道を行うのであるという意味の事が書いてあつた。花房はそれを見て、父の平生へいせいを考へて見ると、自分が遠い向うに或物を望んで、目前の事を好いい加減に済ませて行くのに反して、父はつまらない日常の事にも全幅の精神を傾注しているということに気が附いた。宿場しゆくばの医者たるに安んじている父の [resignation] 《レジニアション》の態度が、有道者の面目に近いということが、臃おぼろげ気ながら見えて来た。そしてその時から遽にわかに父を尊敬する念を生じた。

實際花房の氣の付いた通りに、翁の及び難いところはここに存そんじていたのである。

花房は大学を卒業して官吏になつて、半年ばかりも病院で勤めていただろう。それから後は学校教師になつて、Laboratorium

《ラボラトリウム》に出しゅつにゆう入するばかりで、病人というものを扱った事が無い。

それだから花房の記憶には、いつまでも千住の家で、父の代診をした時の事が残っている。それが医学をした花房の医者らしい生活をした短い期間であつた。

その花房の記憶に僅わずかに残っている事を二つ三つ書く。一体医者ひとの為めには、軽い病人も重い病人も、贅ぜいたくぐすり沢薬を飲む人も、病氣が死活問題になつてひといる人も、均しくこれ casus 《カズス》

である。Casus 《カズス》として取り扱って、感動せず、冷眼に視ている処に医者**の強みがある**。しかし花房はそういう境界には到らずにしまった。花房はまだ病人が人間に見えているうちに、病人を扱わないようになってしまった。そしてその記憶には唯の *triosa* 《クリオザ》が残っている。作者が漫然と医者の術語を用いて、いれに *Casistica* 《カズイスチカ》と題するのは、花房の冤枉えんおうとする所かも知れない。

落架風らつかふう。花房が父に手伝をしようと云つてから、間のない時の事であった。丁度新年で、門口に羽根を衝ついていた、花房の妹の藤子が、きやつと云つて奥の間へ飛び込んで来た。花月新誌の新年号を見ていた花房が、なんだと問うと、恐ろしい顔の病人が

来たと言ふ。どんな顔かと問えば、只食い付きそうな顔をしていたから、二目と見ずに逃げて這入つたと云う。そこへ佐藤という、色の白い、髪を長くしている、越後生れの書生が来て花房に云つた。

「老先生が一寸お出下さるようにと仰やいますが」

「そうか」

と云つて、花房は直ぐに書生と一しよに広間に出た。

春慶塗の、楕円形だえんけいをしてゐる卓の向うに、翁はにこにこした顔をして、椅子いすに寄り掛かつていたが、花房に「あの病人を御覽」と云つて、顔で方角を示した。

寝台ねだいの据えてあるあたりの畳の上に、四十しじゅう余りのお上かみさんと、

二十ばかりの青年とが据わっている。藤子が食い付きそうだと云ったのは、この青年の顔であつた。

色の蒼白い、面長な男である。下顎を後下方へ引つ張つてゐるように、口を開いてゐるので、その長い顔が殆ど二倍の長さに引き延ばされてゐる。絶えず涎が垂れるので、畳んだ手拭で腮を拭いてゐる。顔位の狭い面積の処で、一部を強く引つ張れば、全体の形が變つて来る。醜くくはない顔の大きい目が、外眦を引き下げられて、異様に開いて、物に驚いたように正面を凝視してゐる。藤子が食い付きそうだと云つたのも無理は無い。附き添つて来たお上さんは、目の縁を赤くして、涙声で一度翁に訴えた通りを又花房に訴えた。

お上さんの内には昨夜骨牌会ゆうべかるたかいがあつた。息子さんは誰たれやらと札の引張合いをして勝つたのが愉快だというので、大声に笑つた拍子に、顎あごが両方一度に脱はずれた。それから大騒ぎになつて、近所の医者に見て貰つたが、嵌はめてはくれなかつた。このままで直らなかつたらどうしようというので、息子よりはお上さんが心配して、とうとう寐ねられなかつたというのである。

「どうだね」

と、翁は微笑ほほえみながら、若い学士の顔を見て云つた。

「そうですね。診断は僕もお上さんに同意りようします。両側そく下顎かがくだ

脱つき臼ゆうです。昨夜脱臼ゆうべしたのなら、直ぐに整復せいふくが出来る見込みこです」

「遣やつて御覽ごらん」

花房は佐藤にガアゼを持って来させて、両手の拇指おやゆびを厚く巻いて、それを口に挿さし入れて、下顎を左右二箇所ふたかたで押えたと思うと、後部を下へぐつと押し下げた。手を緩ゆるめると、顎は見事に嵌まつてしまった。

二十の涎よだれ線せんりは、今まで腮ほを押えていた手拭で涙を拭いた。お上さんも袂たもとから手拭を出して嬉うれし涙を拭いた。

花房はしたり顔に父の顔を見た。父は相変らず微笑んでいる。「解剖を知っておるだけの事はあるのう。始てのようではなかつた」

親子が喜び勇んで帰った迹あとで、翁おきなは語ことばを続ついでこう云った。

「下顎の脱臼は昔は落架風と云つて、或る大家は整復の秘密を人

に見られんように、大風炉敷おおぶろしきを病人の頭から被かぶせて置いて、術を施したものだよ。骨の形さえ知っていれば秘密は無い。皿の前の下へ向いて飛び出している処を、背後うしろへ越させるだけの事だ。学問は難ありがた有いものじやのう」

一枚板。これは夏のことであつた。瓶有村かめありむらの百姓が来て、倅せがれが一枚板になつたから、来て見て貰もらいたいと云つた。佐藤が色々容態を問うて見ても、只繰り返して一枚板になつたというばかりで、その外にはなんにも言わない。言うすべを知らないのである。翁は聞いて、丁度暑中休みで帰っていた花房に、なんだか分からぬが、余り珍らしい話だから、往つて見る気は無いかと云つた。

花房は別に面白い事があるうとも思わないが、訴えの詞ことばに多少の好奇心を動かされないでもない。とにかく自分が行くことにした。

蒸暑い日の日盛りに、車で風を切つて行くのは、却かえつて内うちにいるよりは好い心持であつた。田と田との間に、堤のように高く築き上げてある、長い長いなわてみち 暇なわてみち 道を、汗を拭きながら挽ひいて行く定吉に「暑かろうなあ」と云えば「なあに、寝ていたつて、暑いのは同じ事ださあ」と云う。一本一本の榛はんの木から起る蝉せみの声に、空気の全体が微かすかに顫ふるえているようである。

三時頃に病家に著いた。杉の生垣いけがきの切れた処に、柴折戸しおりどのような一枚の扉とびらを取り付けた門を這入ると、土を堅く踏み固めた、

広い庭がある。穀物を扱う処である。乾き切った黄いろい土の上に日が一ぱいに照っている。狭く囲まれた処に這入ったので、蟬の聲が耳を塞ぎたい程やかましく聞える。その外には何の物音もない。村じゆうが午ひるやす休みをしている時刻なのである。

庭の向うに、横に長方形に立ててある藁葺わらぶきの家が、建具ことごとを悉くはずして、開け放つてある。東京近在の百姓家の常で、向つて右に台所や土間が取つてあつて左の可なり広い処を畳敷にしてあるのが、只一目に見渡される。

縁側なしに造つた家の敷居、鴨居かもいから柱、天井、壁、畳まで、*bitume* 《ビチュウム》の勝つた画のように、濃淡種々の茶褐色に染まっている。正面の背景になっている、濃い褐色に光つてい

る戸棚の板戸の前に、煎餅せんべい布団ふとんを敷いて、病人が寝かしてある。家族の男女が三四人、涅槃図ねはんずを見たように、それを取り巻いている。まだ余りよごれていない、病人の白地の浴衣ゆかたが真白に、西洋の古い戦争の油画で、よく真中にかいてある白馬のように、目を刺激しげきするばかりで、周囲の人物も皆褐色である。

「お医者様が来ておくんなされた」

と誰やらが云ったばかりで、起たつて出迎えようともしない。男も女も熱心に病人を目守まもっているらしい。

花房の背後うしろに附いて来た定吉は、左の手で汗を拭きながら、提さげて来た藁籠やぐらうの風呂敷包を敷居きわのきわに置いて、台所の先きの井戸へ駈けて行つた。直ぐにきいきいと轆轤ろくろの軋きしる音、ざっざつと

水を翻こぼす音がする。

花房は暫しばらく敷居の前に立って、内の様子を見ていた。病人は十二三の男の子である。熱帯地方の子供かと思うように、ひどく日に焼けた膚の色が、白地の浴衣で引っ立って見える。筋肉の緊しまつた、細く固く出来た体だということが一目で知れる。

暫く見ていた花房は、駒下駄こまげたを脱ぎ棄てて、一足敷居の上に上がった。その刹那せつなの事である。病人は釣り上げた鯉こいのように、煎餅布団の上で跳ね上がった。

花房は右の片足を敷居に踏み掛けたままで、はっと思つて、左を床の上へ運ぶことを躡ちゆうちよ躡ちゆうちよした。

横に三畳の畳を隔てて、花房が敷居に踏み掛けた足の撞とう突とつが、

波動を病人の体に及ぼして、微細な刺戟が猛烈な全身の痙攣けいれんを誘いざない起したのである。

家族が皆じつとして据わっていて、起つて客を迎えなかつたのは、百姓の礼儀を知らない為めばかりではなかつた。

診断は左の足を床の上に運ぶ時に附いてしまった。破傷風である。

花房はそつと傍そばに歩み寄つた。そして手を触れずに、やや久しく望診していた。一枚の浴衣を、胸をあらわして著ているので、殆ど裸体も同じ事である。全身の筋肉が緊縮して、体は板のようになつていて、それが周囲のあらゆる微細な動揺に反はん応おうして、痙攣を起す。これは學術上の現症記事ではないから、一々の徴候

は書かない。しかし卒業して間もない花房が、まだ頭にそっくり持っていた、内科各論の中の破傷風の徴候が、何一つ遺れられずに、印刷したように滲み出している汗までが、約束通りに、遺れられず並べたように滲み出している汗までが、約束通りに、遺れられずにいた。

一枚板とは実に簡にして尽した報告である。知識の私に累せられない、純樸じゆんぼくな百姓の自然の口からでなくては、こんな詞の出ようが無い。あの報告は生活の印象主義者の報告であった。

花房は八犬伝の犬塚信乃いぬづかしのの容体に、少しも破傷風らしい処が無かつたのを思い出して、心の中に可笑しく思った。

傍そばにいた両親の交かわる交がわる話すのを聞けば、この大切な一人息子

は、夏になってから毎日裏の池で泳いでいたということである。体中に掻きむしったような瘻きずの絶えない男の子であるから、病原菌の浸入口はどこだか分からなかった。

花房は興味ある casus 《カズス》 だと思つて、父に頼んでこの病人の治療を一人で受け持った。そしてその経過を見に、度々瓶有村の農家へ、炎天を侵おかして出掛けた。途中でひどい夕立に逢あつて困つた事もある。

病人は恐ろしい大量の Chloral 《クロラアル》 を飲んで平氣でいて、とうとう全快してしまつた。

生理的腫瘍しゅよう。秋の末で、南向きの広間の前の庭に、木葉が掃いても掃いても溜たまる頃であつた。丁度土曜日なので、花房は泊

り掛けに父の家へ来て、診察室の西にしみなみ南なみなみに新しく建て増した亜ト鉛タンぶき葺の調剤室と、その向うに古い棗なつめの木の下に建ててある同じ亜鉛葺の車小屋との間の一坪ばかりの土地に、その年沢山実のなつた錦荔れいし支つるの蔓の枯れているのをむしっていた。

その時調剤室の硝子窓ガラスまどを開けて、佐藤が首を出した。

「一寸ちよつと若先生に御覧を願いたい患者がございますか」

「むずかしい病気なのかね。もうお父とさんが帰ってお出いでになるだろうから、待またせて置けば好いいじゃないか」

「しかしもうだいぶ長く待せてあります。今日の最終の患者ですから」

「そうか。もう跡あとは皆みんなな帰ったのか。道理でひどく静かになった

と思った。それじゃあ余り待たせても気の毒だから、僕が見ても
好い。一体どんな病人だね」

「もう土地の医師の処を二三軒廻つて来た婦人の患者です。最初
誰かにちようまん脹満だと云われたので、水を取つて貰うには、外科の
お医者が好きだろうと思つて、誰かの処へ行くと、どうも堅いから
癌がんかも知れないと云つて、針を刺してくれなかつたと云うのです」
「それじゃあ腹水か、ふくこう腹腔の腫瘍かという問題なのだね。君は
見たのかい」

「ええ。波動はありません。既往症を聞いて見ても、肝臓に何か
来そうな、取り留めた事実もないのです。酒はどうかと云うと、
厭いやではないと云います。はてなと思つて好く聞いて見ると、飲ん

でも二三杯だと云うのですから、まさか肝臓に変化を来す程のこともないだろうと思います。栄養は中等です。悪性腫瘍らしい処は少しもありません」

「ふん。とにかく見よう。今手を洗って行くから、待つてくれ給え。一体医者が手をこんなにしてはたまらないね、君」

花房は前へ出した両手の指のよごれたのを、かが屈めて広げて、人につか掴み付きそうな風をして、佐藤に見せて笑っている。

佐藤が窓を締めて引っ込んでから、花房はゆっくり手を洗って診察室に這入った。

例の寝台の脚のあし処に、二十二三のくしまき櫛巻の女が、半襟の掛かめいせんつた銘撰の半纏はんでんを着て、絹のはでな前掛を胸むな高ただかに締めて、

右の手を畳に衝いて、体を斜にして据わっていた。

琥珀色こはくいろを帯びた円い顔の、目の縁ふちが薄赤い。その目でちよい

と花房を見て、直ぐに下を向いてしまった。Cliente 《クリアント》
としてこれに対している花房も、ひどく媚こびのある目だと思った。

「寝台に寝させましょうか」

と、附いて来た佐藤が、知れ切った事を世話焼顔に云った。

「そう」

若先生に見て戴いたくただのだからと断つて、佐藤が女に再び寝台に寝
ることを命じた。女は壁の方に向いて、前掛と帯と何本かの紐ひも
を、随分気長に解いている。

「先生が御覧になるかも知れないと思つて、さつきそのまま待

っているように云つといたのですが」

と、佐藤は言分けらしくつぶやいた。掛布団もない寝台の上でそのまま待てとは女の心を知らない命令であつたかも知れない。

女は寝た。

「膝ひざを立てて、楽に息をしてお出いで」

と云つて、花房は暫く擦すり合せていた両手の平を、女の腹に当てた。そしてちよいと押えて見たかと思うと「聴診器を」と云つた。

花房は佐藤の卓の上から取つて渡す聴診器を受け取つて、臍へその近処に当てて左の手で女の脈を取りながら、聴診していたが「もう宜よろしい」と云つて寝台を離れた。

女は直ぐに着物の前を掻き合せて、起き上がろうとした。

「ちよつとそうして待っていて下さい」

と、花房が止めた。

花房に黙って顔を見られて、佐藤は機嫌きげんを伺うように、小声で云った。

「なんでございましょう」

「腫瘍は腫瘍だが、生理的腫瘍だ」

「生理的腫瘍」

と、無意味に繰り返して、佐藤は呆あきれたような顔をしている。

花房は聴診器を佐藤の手に渡した。

「ちよつと聴いて見給え。胎児の心音が好く聞える。手の脈と一

致している母体の心音よりは度数が早いからね。」

佐藤は黙って聴診してしまつて、忸怩たるものがあつた。

「よく話して聞せて遣つてくれ給え。まあ、套管針なんぞを立てられなくて為合せだつた」

こう云つて置いて、花房は診察室を出た。

子が無くて夫に別れてから、裁縫をして一人で暮している女なので、外の医者には妊娠に気が附かなかつたのである。

この女の家の門口に懸かっている「御仕立物」とお家流で書いた看板の下を潜つて、若い小学教員が一人度々出入をしていたということが、後になつて評判せられた。

青空文庫情報

底本：「山椒大夫・高瀬舟」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年5月30日発行

1985（昭和60）年6月10日41刷改版

1990（平成2）年5月30日53刷

※底本には、表記の変更に関する以下の注記が見られる。

「本書は旧仮名づかいで書かれていたものを（中略）、現代仮名づかに改めた。」

加えて、極端な宛て字と思われるもの、代名詞、副詞、接続詞などは、以下のように書き換えたところがある。

…か知ら↓…かしら 此↓かく 彼此↓かれこれ …切り↓…き
 り 此↓これ 是↓これ 流石↓さすが 併し↓しかし 切角↓
 せっかく 其↓その 大ぶ↓だいぶ …丈↓…だけ 兎角↓とに
 かく 所で↓ところで 只管↓ひたすら 迄↓まで 儘↓まま
 矢張↓やはり

入力：砂場清隆

校正：松永正敏

2000年8月9日公開

2006年5月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>)

W.AOZORA.GR.JP/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

カズイスタチカ

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>